**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第８４回　（２０２２年２月１３日）**

**・勉強範囲：「第四章　在家の人への助言」４３頁**

**～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～**

**📖４３頁下段　後ろから４行目**

**（ケダールおよび他の信者たちに）神は、あらゆる道を通って悟ることができる。**

**（解説）**

ゆっくり理解していきましょう。「あらゆる道で悟ることできる」、それがまず大事なポイントです。

**📖すべての宗教が本物だ。**

**（解説）**

「本物」は「正しい」ということです。

**📖大切なのは屋根に達することだ。**

**（解説）**

「屋根」とは「人生の目的」という意味です。

**📖屋根には石の階段か木の階段で登ることもできるし、竹のはしごで登ることも、縄で登ることもできる。また竹の棒でよじ登ることもできるだろう。**

**（解説）**

「人生の目的に至る方法にはいろいろある」ということです。

**📖　お前たちは、他の宗教にはさまざまの間違いや迷信がある、と言うかもしれない。私は答えよう——それはあるだろう。あらゆる宗教が間違いを持っている。**

**（解説）**

ここで矛盾を感じませんか？　先程シュリー・ラーマクリシュナは、「すべての宗教は正しい」と言っていました。そして今、「すべての宗教には間違いがある」と言っています。

聖典には儀式についてなど、細かく詳しいことも書かれており、それには間違いの可能性もあります。それは「砂糖の中に砂が混じっているようなもの」で、同じような粒に見えても選り分けなければなりません。一方で、すべての聖典の真髄は「真理」であり（釈迦は神についてあまり言及しませんでしたが真理と神とは同じものです）、それは「神を悟るには純粋にならなければならない、神への愛を培わなければならない」「神はおられる」「神を悟ることはできる」「悟れば執着・恐れ・悲苦は消え、至福を味わい自由を得る」という「霊的な教え」です。聖典には間違いがある可能性がある一方、すべての聖典のエッセンスは正しい──そのことをシュリー・ラーマクリシュナは指摘したのでした。

**📖誰もが自分の時計だけが正しい時を告げる、と思うのだ。神へのあこがれがありさえすればそれで十分だ。彼を愛し、彼に心を引かれるならそれで十分だ。神はわれわれの内なる案内人だ、ということを知らないか。彼はわれわれのハートの願いと魂のとをごらんになるのだ。ある人が数人の息子を持っているとする。上の息子たちは彼をはっきりと、ババとかパパとか呼ぶが、幼い子供たちはせいぜい、バーとかパーとか呼べるだけだ。さて、父親はこの不明瞭な呼び方をする子供たちに腹を立てるかね。父は、彼らもやはり彼を呼んでいて、ただ彼の名を正確に発音できないだけであることをよく知っている。****父親にとって、すべての子供はおなじである。**

**（解説）**

たとえば完璧に発音できずに間違って呼びかけても、親は子供の言うことを理解します。そのように、神も人の心中を理解し、間違うことがあっても気になさいません。ババはベンガル語でパパのことです。

**📖同様に信者たちは、さまざまの名によってではあるが、神のみに呼びかけているのだ。たった一人の御方を呼んでいるのである。神は一人、しかし彼のはたくさんある」**

**（解説）**

このような歌があります［👉賛歌。映像データの２６：３５頃］。この歌では、シュリー・ラーマクリシュナの言葉をそのまま歌詞にして、「水はアクア、ウォーター、パーニとさまざまな名で呼ばれる」「神はアッラー、ゴッド、イーシャ（＝イエス）、ムシャー、カーリーとさまざまな名で呼ばれる」と言っています。

歌詞の「エシェチェーウタヌマヌ　デーヴィジャディーアイチャレ」とは、「新しい種類の方が現れました。見たいなら皆さん来てください。その方はシュリー・ラーマクリシュナです」という意味で、シュリー・ラーマクリシュナの誕生日によく歌われています。

**「神は一人、御名はさまざま」「信仰の数だけ悟りの道がある」**

今日のテーマは、「神は一人、御名はさまざま」です。たとえばシュリー・クリシュナには108とか1000とかのサハスラ・ナーマがあるとされており、それらすべてを唱える賛歌はインド人に人気です（南インドでは特に人気です）。その歌ではクリシュナの性質やお遊びには一切ふれず、ひたすら御名だけを歌います。

「神は一人、御名はさまざま」──すなわち『ラーマクリシュナの福音』に何回も出てくる「ジャト　マト　タト　パト」（ベンガル語）です。

（板書）Jato mato tato path

英訳は「As many faith, so many path.」、和訳は「信仰の数だけ道がある」ですが、正しく表現すると「信仰の数だけ悟りの道（path for God realization）がある」になります。またそう表現しなければ「道とは何の道ですか？」と混乱してしまうでしょう。

「信仰の数だけ悟りの道がある」──それがシュリー・ラーマクリシュナの結論であり、ひとつの大きな教えです。まず大事なことは、それは頭での理解ではない、ということです。

ある学者が聖書やコーランやヒンドゥ教聖典や釈迦の言葉を勉強してシュリー・ラーマクリシュナと同じ結論に達する可能性もあるでしょう。しかし頭（知性）だけの理解では、次のような問題が生じます。

１つは人によって理解が異なるので結論も異なる、ということです。ある学者は別の議論を使って神はいないと結論づけるかもしれません。またある学者は神はいるが悟ることはできないと結論づけるかもしれません。また別の学者は道徳的に生きるため、社会を維持するためには神のアイディアが大事である（＝非道徳である場合、その人を罰するために神のアイディアが必要）と結論づけるかもしれません。このように、各人で理解する方法も力も違うので結論が異なるのも当然です。

もう1つは絶対無限なる神（魂）を、相対的で有限な知性のレベルでは知ることはできない、という問題です。つまり神についての理解は知性や自我を超越しなければ不可能なのに、知性だけに任せて理解しようとするなら、間違う可能性があります。なぜなら知性の中にはカーマ、クローダ、グナ、サムスカーラがあるからです。すると正しい結論が得られません。

それと比べてシュリー・ラーマクリシュナはみずから実践して悟って結論に達しました。頭で理解した結論とはインパクトも影響も異なるのです。

ところで本当に真理に達したかどうかを確かめるには、どうしたらよいのでしょうか？　これについてシャンカラーチャーリヤは「シュルティ（聖典）、ユクティ（議論して得た結論）、アヌバーヴァ（霊的実践の結果＝実体験）がすべて同じである場合、真理である」と言っています。

（板書）Shruti　Yukti　Anubhava

**シュリー・ラーマクリシュナの特徴**

では、他の悟った方々とは異なる、シュリー・ラーマクリシュナの特徴とは何でしょうか？

たとえばある信者はヴィシュヌ神を礼拝し、祈り、瞑想し、御名を唱え、霊的実践をして悟りました。するとその聖者の考えは「ヴィシュヌが最も正しい神」となり、皆に「ヴィシュヌ神を礼拝して下さい。ヴィシュヌ神に祈って下さい。ヴィシュヌ神を瞑想して下さい」と伝えるでしょう。シヴァ神を礼拝し祈り瞑想し御名を唱えて悟った別の聖者は「シヴァ神を礼拝し瞑想して下さい。シヴァ神が最も偉大な神です」と言うでしょう。カーリー女神を悟った聖者はマザー・カーリーが、クリシュナを悟った聖者はクリシュナが最も偉大だと主張し、結果、それぞれの信者の間には「自分の決めた神（イシュタ）があなたのイシュタより偉大」という摩擦があり常に争っています。

──クリシュナの信者は、「（世俗の）海を渡るための船頭がクリシュナである」と主張します。一方、マザー・カーリーの信者は「確かに海を渡るには船頭が必要である。だがマザー・カーリーは『皇后』だから、船頭という低いレベルの仕事はなさらない。クリシュナにその仕事をするよう命じるのみである」と言って対抗します──

また、釈迦について考えてみてください。釈迦は神がいる/いないについてほとんど言及しませんでしたが、後になって、釈迦は信者にとっての「神」となりました。実際、仏教寺院の祭壇には釈迦像があるでしょう？　つまり仏教徒の見方では釈迦は神であり、正しい教えを説いた預言者なのです。すると仏教徒は「他の宗教と比べて仏教が最も偉大な宗教である。釈迦が最も偉大である」という考えになるでしょう。

イエスも神像の礼拝はしておらず、神の性質（formless God）を礼拝していたので、イエスの信者たちは当然「形はないが、性質のある神が正しい」と信じ、それが最高神だと考えるでしょう。そしてそれを信仰するキリスト教だけが正しい、その教えが書かれている聖書だけが正しいと考えるでしょう。

ムハンマドも神像、つまり形がある神を信じていませんでした。ムハンマドは神はおられ、神は良い性質を持っているが、形はないと考えていました。するとその教えを信仰するイスラーム教徒は「イスラーム教が正しい宗教だ。コーランが正しい聖典だ。ムハンマド様が最高の預言者だ」と考えるでしょう。

そうした考えの延長線上に、今現在もあります。しかしその種類の考え（＝仏教の教えだけ正しい、釈迦だけ正しい、キリスト教だけ正しい、イエスだけ正しい、聖書だけ正しい、イスラーム教だけ正しい、コーランだけ正しい、ムハンマドだけ正しい……）とシュリー・ラーマクリシュナの結論とでは、異なりませんか？

シュリー・ラーマクリシュナの言うことは、「全ての宗教は正しい」です。それがシュリー・ラーマクリシュナの特徴です。それがシュリー・ラーマクリシュナの、アヌバーヴァのポイントです。シュリー・ラーマクリシュナはみずから悟ってそのことを理解しました。

もちろんイエスもムハンマドも釈迦もアヌバーヴァによって得た理解でしたし、決して間違ってはいません。ですがシュリー・ラーマクリシュナの特徴は、それだけが正しいとは言わなかったことです。シュリー・ラーマクリシュナの経験は「それも正しい、これも正しい、全て正しい」でした。別の言葉を使うなら、「狭い」と「広い」の違いです。

問題はいつ、何から始まりますか？　「私の宗教は正しい。あなたの宗教は間違っている」というドグマティズム（独断的な考え）からです。その考えが、「あなたは私の宗教を信じないといけない」という強引な改宗や、他宗教の信者の殺害や、礼拝場所の破壊などを行わせるのです。歴史を振り返るとそのようなことは数知れずあります。西インドのソムナート寺院（Somnath temple）は16回破壊され、強引に改宗もさせられました。

それに対して、シュリー・ラーマクリシュナの教えは調和的です。私たち皆がシュリー・ラーマクリシュナの結論、「信仰の数だけ悟りの道がある」を実践すれば、問題は無くなるでしょう。

シュリー・ラーマクリシュナの直弟子、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは何と言っていましたか──「私の願いは仏教徒をヒンドゥ教徒にすることではない。キリスト教徒をヒンドゥ教徒にすることでもない。あなたが仏教徒だったらもっと偉大な仏教徒になってください、あなたがキリスト教徒だったらもっと偉大なキリスト教徒になってください、ということです」。

これは非常に洞察に富んだ意見です。大事なことは、みずからが信じる宗教で、みずからを理想に近づけることであり、他の宗教と比較したり、他の宗教の間違いを探したり、何の道が正しいのかと言って言い争いをしないということです。ひたすら「目的」について考え、それにまい進するのです。「目的は１つ、道はたくさん」だからです。

宗教間の争いの原因は何にありますか？　「目的」について考えてないことにあります。なぜそのような考えになるのですか？　奢っているからです、うぬぼれているからです。それによって自分の宗教だけが偉大だと思うのです。では奢りやうぬぼれの原因は何ですか？　自分のエゴ（自我）です。たとえば私の両親はヒンドゥ教徒で、私もヒンドゥ教徒だなどとエゴで考えること、あるいは国について、仕事について、故郷や住んでいる町についても（たとえば大阪より東京のほうが優れているなどと考える人もいるでしょう？）そのように考えることです。マイ・カントリー、マイ・ホーム、すべてに「私」が入っているのです。

シュリー・ラーマクリシュナは、はじめはマザー・カーリーを礼拝して悟りました。ですがそのあと「他の信者はシヴァを礼拝してシヴァを悟ったと言う。私もそれを知りたい」という興味が湧きました。シュリー・ラーマクリシュナは「悟ったからそれで終わり」、ではなかったのです──ある人は一種類の食べ物で十分ですが、いろいろな料理を好む人もいるでしょう？　シュリー・ラーマクリシュナは後者でした。シュリー・ラーマクリシュナはひとつの方法だけ、ひとつの食べ物だけでは十分ではありませんでした。モノフォニー、同じメロディだけでは満足しませんでした。他の味も味わいたいと思ったし、複数のメロディ（ポリフォニー）をききたかった。朝のラーガ（メロディ）、お昼のメロディ、夕方のメロディ、真夜中のメロディ、冬のメロディ、梅雨の時のメロディもききたかった。それが特別です──それがシュリー・ラーマクリシュナの特徴であり、その結果「信仰の数だけ悟りの道がある」という結論に達したのです。

シュリー・ラーマクリシュナは、ヒンドゥ教だけでなく、キリスト教、イスラーム教も実践して悟りました。キリスト教の実践のあと、イエスがあらわれてシュリー・ラーマクリシュナの身体に入りました。イスラーム教の実践のあと、ムハンマドがあらわれてシュリー・ラーマクリシュナの中に入りました。それぞれの宗教の悟りの方法をみずから実践して「ジャト　マト　タト　パト」という理解に達したのです。それがシュリー・ラーマクリシュナの大きなインパクトです。

『福音』で、シュリー・ラーマクリシュナはいつも「Don’t be dogmatic, don’t be dogmatic.」と言っていましたね。当時も宗派間、宗教間の摩擦があったからです。ですから「どうしてそのような態度をとるのですか？　どの宗教も正しいのです。あなたは自分の宗教の実践をして下さい。そして他宗派や他宗教の神や預言者を尊敬して下さい」と助言していました。それがシュリー・ラーマクリシュナの教えの特徴です。以前の預言者たちはそれほど完璧にそのことを強調してはいなかったのです。

『福音』には何回も同じことが出てきます。たとえば「神はひとつ。名前が別々」、「水を、ヒンドゥ教徒はジャル、イスラーム教徒はパーニ、キリスト教徒はウォーターと呼ぶが、水はすべてH2O」。［👉『ラーマクリシュナの福音』👉p70、p220、p407、p1010　2014年　日本ヴェーダーンタ協会出版］　また、太陽もインドではスーリヤ、日本人は太陽と呼びますが、太陽自体に変わりはありません。カメレオンはあるとき赤、あるとき緑、あるとき黄色ですが、あるときは無色──この話はこの部分が面白いです──あるときには無色で、フォームレス、形がありません。いったいなぜそうだと分かるのでしょうか？　カメレオンが無色で形が無くなることを知っている人は、カメレオンがいる木に住んでいてカメレオンが変化するのを見ているからです。これは、神が、あるときアッラー、あるときゴッド、あるときクリシュナ、あるときマザー・カーリー、そしてあるときには色も形もないブラフマンであるというアイディアが物語になったものです。［👉『ラーマクリシュナの福音』👉p87、p567、p589　2014年　日本ヴェーダーンタ協会出版］

**スワーミー・ヴィヴェーカーナンダのインパクト**

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは言いました、「確かに宗教は私たちを助けてきた。しかし宗教の名によって大勢の人を殺してもきた。だが『宗教の調和』を信じ、それを拠りどころにしたら絶対に殺害などできない」。また「改宗する必要はない。自分の宗教を一生懸命実践するのみだ」とも言いました。

リグ・ヴェーダには「本当は一者なる永遠の存在だけが在る。だが聖者はそれをさまざまな方法でさまざまな言葉を使って説明する」（ekam sat viprā bahudhā vadanti：エーカム　サット　ヴィプラー　バフダー　ヴァダンティ）とあり、「神々はブラフマンという永遠の一者のひとつのあらわれなのだ」という認識が、ヒンドゥ教では昔からありました。

またシヴァ・マヒムナ（Shiva Mahimna Stotram）には「すべての川は海でひとつになる」という節があり［👉サンスクリット朗唱。映像データの１：３８：４０頃］、川は宗教のさまざまな方法、海は宗教の目的をあらわしていますが、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダは有名なシカゴ宗教会議の演説でこの部分を引用しました（サンスクリット語ではなく英語でした）。『シカゴ講話集』を読んで下さい。［👉p8　２００１年　日本ヴェーダーンタ協会出版］

*「源を異にするさまざまの河川が、すべて海に流れ込んで一つになるように、おお主よ、人びとがさまざまの傾向に応じてたどるさまざまの道は、曲がったりまっすぐであったりさまざまに見えるではありましょうが、すべてあなたのもとに達します」*

『バガヴァッド・ギーター』にも同じことがあります。

*私に身と心をねる程度に応じ、私はその帰依した人に報いていく。プリター妃の息子（アルジュナ）よ！　人々は、あらゆる道を通って私のもとへとやってくる。*（第4章11節）

*私を超えるものは何一つ存在しない。真珠が糸を通してがっているように、すべてのものは私を通してがり支えられているのだ。*（第７章７節）

「真珠の首飾りの真珠１粒１粒が宗教。それらを繋げる糸が神」というのはとてもわかりやすいイメージではありませんか？　真珠はそれぞれ異なりますが、糸は同じ糸──それが宗教の調和、シュリー・ラーマクリシュナの唱えた「信仰の数だけ悟りの道がある」です。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダも、自分の宗教を一生懸命に実践し、他の宗教や預言者も尊敬するのだと言いました。それが、ヴェーダーンタの特徴です。

最後にもう一つ説明を加えます。

なぜ西洋の人々はスワーミー・ヴィヴェーカーナンダが語った「宗教の調和」を、「信仰の数だけ悟りの道がある」を好ましく受け取ったのでしょうか？　それは西洋人に自由を重んじる気質があったことと（free thinking people）、論理的合理的な思考態度があった（rational thinking people）からです。

キリスト教会が主張するように「キリスト教だけが正しい。他宗教の神を礼拝したら地獄に墜ちる」というのであれば、釈迦もクリシュナもシュリー・ラーマクリシュナも地獄に墜ちなければなりません。それが論理的なキリスト教徒には信じられなかったのです。狭い教義と感じ、違和感を持っていました。

なぜ違和感があったのですか？　なぜなら皆それぞれ、内に魂があるからです。魂は無限・絶対ですから、自分も無限・絶対だからです（みな魂についてはっきり理解していなくても、「魂がある」ということは、サムスカーラとして自分の内奥で理解しているのです）。ですがキリスト教会が主張してきたことは、それとかけ離れた矛盾したものでした。

そのような時、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダがあらわれて、「神は無限である。ある神だけ正しいと考えるのはおかしい。この神も正しく、あの神も正しいのだ」と明言したのでした。それを聞いた西洋の人々は心に自由のフィーリングが湧き起こるのを感じました。それにスワーミー・ヴィヴェーカーナンダの説明は論理的で合理的でした。それで西洋の人々はスワーミー・ヴィヴェーカーナンダを好きになったのです、ヴェーダーンタを好きになったのです。それが人々の心に与えたスワーミー・ヴィヴェーカーナンダのインパクトです。ヴェーダーンタのインパクトです。

**（賛歌奉献）**（映像データの１：５２：０３頃）

「チャロマナ　ガンガー　ヤムナーティー」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上